

平成 21 年 3 月期 第 3 四半期決算に関する主な質疑応答

本資料には、将来の業績に関する記述が含まれています。こうした記述は、将来の業績を保証するものではなく、リスクと不確実性を内包するものです。将来の業績は、経営環境に関する前提条件の変化等に伴い、予想対比変化する可能性があることにご留意ください。

平成 21 年 1 月 28 日(水)に発表致しました平成 21 年 3 月期 第 3 四半期決算につきまして、皆様からお問い合わせの多いご質問への回答を、以下の通り掲載致します。

Q1. 平成 21 年 3 月期 第 3 四半期決算を総括すると、どうですか。

A1. 三井住友銀行単体では、第 3 四半期累計期間(4-12 月)の業務純益(一般貸倒引当金繰入前)は 6,273 億円と、前年同期比 608 億円の増益となりました。昨年 11 月公表の 20 年度通期業績予想に対する進捗率でも約 78%と、順調に推移しました。また、株式等償却や与信関係費用も想定範囲内に収まりましたことから、第 3 四半期累計期間(4-12 月)の純利益も 1,205 億円と、前年同期比 330 億円の増益を確保しました。一方、三井住友フィナンシャルグループ連結では、一部子会社・関連会社の業績不振を主因に、第 3 四半期累計期間(4-12 月)の純利益は 834 億円と、三井住友銀行単体対比約 370 億円低い水準となりました。なお、三井住友フィナンシャルグループ連結の第 3 四半期累計期間(4-12 月)の純利益は、前年同期比 2,360 億円の減益となっていますが、このうち約 1,000 億円は、19 年度にリース事業会社合併に伴う特別利益を計上した影響によるものです。

Q2. 有価証券評価損益の状況は。

A2. 平成 20 年 9 月末に 11,260 円だった日経平均株価は、同 12 月末には 8,860 円にまで下落致しましたが、三井住友銀行では、「その他有価証券」における株式の評価損益(期末 1 ヶ月の平均時価で算出)はネットで 1,493 億円の含み益を維持しています。債券等を含めた「その他有価証券」全体(「その他の金銭の信託」を含む)の評価損益も、ネットで 591 億円の含み益となっています。

Q3. 貸出の増減状況及びその要因について教えてください。

A3. 平成20年12月末の貸出金残高（三井住友銀行単体）は61兆1,527億円と、20年9月末対比約2兆6,000億円の増加となりましたが、これは、国内店（除く特別国際金融取引勘定）が、20年9月末対比約3兆4,000億円の増加となる一方で、海外店（含む特別国際金融取引勘定）が約7,600億円減少したことによります。

国内では、直接金融市場の機能低下に伴う大企業における銀行借入需要の拡大に対応し、企業金融部門の貸出金残高が約1兆9,000億円増加した他、中小企業に対する円滑な資金供給にも積極的に取り組み、法人部門の貸出金残高が、20年9月末対比約5,000億円増加しました。

一方、海外では、グローバルに景況感が急速かつ大幅に悪化するなか、下期に入り、より慎重な運営を行っています。今後も案件の中身等をしっかりと見極め、適切なリスク管理を行いながら、リスクリターンの目線を従来以上に高めて運営を行っていく方針です。

Q4. 与信関係費用について説明してください。

A4. 平成21年3月期第3四半期累計期間(4-12月)における三井住友銀行単体の与信関係費用は2,766億円となりました。昨年11月公表の20年度通期業績予想における与信関係費用の予想額3,700億円に対しては約75%の進捗と、概ね想定範囲内で推移しています。なお、20年12月末における三井住友銀行単体の金融再生法開示債権残高は、同年9月末比579億円減少し1兆190億円、不良債権比率は9月末比0.13%低下し1.49%となりました。

Q5. 証券化商品等の保有状況について教えてください。

A5. 平成20年12月末時点において当社グループが保有する証券化商品等（米国政府支援機関保証債等を除く）の償却・引当控除後の残高は、サブプライム関連で6億円、サブプライム関連以外で約360億円です。なお、21年3月期第3四半期累計期間(4-12月)における証券化商品等に係る損失処理額は、サブプライム関連で▲30億円、サブプライム関連以外で▲31億円です。